

Title	教育における「主体性」概念の研究：高坂正顕の教育思想を中心に
Sub Title	
Author	山田, 真由美(Yamada, Mayumi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2014
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.78 (2014.) ,p.179- 181
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成25年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000078-0179

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

教育における「主体性」概念の研究

—高坂正顕の教育思想を中心に—

山 田 真 由 美

研究目的

本研究は、戦前期の京都学派が展開した歴史哲学における「主体」への思索を検討することで、教育における「主体性」概念について歴史的世界の視点から考察しようとするものである。本研究期間では、京都学派の哲学者のうち特に「世界史の哲学」派と称される高坂正顕（1900-1969）に着目し、彼の『歴史的世界』（1937）に展開される「主体」概念を、戦後の著書『教育哲学』（1970）との関連において検討。高坂の教育思想が、歴史的世界に限定されながらも自らが自由なる主体として歴史を創造する「歴史的主体」の形成を意図していたことを明らかにし、その再検討を試みた。以下、本研究期間における研究の背景と成果を報告する。

研究の背景

近年、矢野智司らの研究によって戦後教育学における京都学派の重要な連関が明らかにされつつある（矢野 2013）。また田中毎実は、木村素衛から森昭に連続する教育思想を「京都学派教育学」として具体化し、その特徴を継承した「臨床的人間形成論」の構築を試みている（田中 2012）。しかし矢野や田中に代表される現在の京都学派研究では、西田哲学に対する田辺の「種の論理」の提唱を端緒として、戦前の京都学派に最も活発に論じられたはずの歴史哲学の問題がその視界の外側におかれている。そのため現在の教育学における京都学派研究は非常に狭い意味での「京都学派教育学」といわざるを得ず、哲学の側からなされる京都学派批判や「近代の超克」再評価に対してそれがどのような位置づけをもつかということも不明瞭なままであった。

そこで本研究は、戦前期の京都学派が論じた歴史的世界における「主体」の問題に着目した。戦前・戦中期に「歴史的世界」の問題に取り組んだ京都学派の主要な問題は、個人と世界がいかなる関係にあるかということにあり、より具体的には歴史的世界に台頭し歴史を動かす歴史的主体の探究にあった（古田 1965）。そうした彼らの戦中の哲学は、戦後において国家主義への責任を問われ続けている（轟 2004）。戦争責任から教育思想のみを救い出そうとするのではなく、歴史哲学の問題圏をも含んだ「京都学派教育学」において彼らの思索を吟味し、それが抱える根本的な問題についても議論しなければならない。本研究で着目した高坂は、戦後教育学の領域に移行し、晩年は中教審答申『期待される人間像』（1966）の主査を務めている。第二次大戦を挟んで歴史哲学と教育学の双方に積極的にかかわる高坂の思索を検討することは、京都学派の歴史哲学の問題を、教育学の問題として提起する重要な媒介になると考えた。答申『期待される人間像』と併せて現在まで非難されるように、彼の教育思想は天皇および国家に歴史の主体を見いだし、それに従属する没主体的な個人の形成を意図したのだろうか（船山 1981）。高坂の「主体」概念を歴史哲学に遡って検討することで、歴史的世界の問題を「京都学派教育学」での議論の俎上にのせ、特に国家と個人の関係から教育における「主体性」概念を明らかにすることを本研究の課題とした。

研究成果

1 『歴史的世界』(1937)における「主体」

歴史哲学における高坂の「主体」概念を明らかにするにあたり、彼の師である西田幾多郎と田辺元が展開した両哲学との接点を探りながら、『歴史的世界』に展開される高坂哲学の独自性を見いだした。同書について高坂が「西田哲学と田辺哲学の止揚の試み」と語るように、『歴史的世界』では、歴史的主体概念において西田哲学の「行為的直観」と田辺哲学の「種の論理」との止揚・綜合が試みられている。ヘーゲルの歴史哲学において「理性の狡知」に操られるのみとされた個人的なるものの没却に疑義を呈した高坂は、西田哲学に展開される「行為的直観」の思索を引き受けることで個人と世界の相互否定的な関係を理論化し、歴史の動力を「永遠の現在」における個的主体の決断にもとめようとする。西田の時間論に端を発する「永遠の現在」とはすなわち過去・現在・未来を包括する自由なる場所のことであり、彼によればそこにおける世界と主体の相互否定により、歴史は不断に新たに創造されるのである。ここに高坂の歴史哲学が、世界とかかわりながら自ら歴史の形成に関与する「主体」の探究である旨が明らかになる。

しかしながら歴史的世界の構造に関心を寄せる高坂の「主体」は、世界と主体がともに無になるところに世界が創造されると説く西田の論理を越えて、確たる「基体」に限定された存在であることが強調される。その「基体」こそ、田辺哲学の「種の論理」から着想を得て展開される「種」としての民族であり、土地であった。「土と血」として語られる種的基体に常に限定されて存在する個的主体であるが、それは単に限定され規定されおわるのではなく、自らの自由性においてそれと絶えず相克する運命にある。その相克において個的主体ははじめて歴史的主体として世界に台頭するとともに、種的基体は国家と文化を創造し、国家と文化という二軸に否定的に介在する歴史的主体の実践において、歴史的世界は不断に新たに創造されるのであった。田辺哲学における「種」の概念を受容した高坂の論理について、個的主体が「土と血」に限定されるという側面のみを強調すれば、国家に従属する没主体的な個人と誤読されようが、しかし高坂の論理に即して言えば、彼が最も強調した論点はその限定からの「逆限定」であり、世界と個人は常に弁証法的に形成されるのである。高坂が歴史的世界の不断の動性すなわち自由性の可能を強調したことは、歴史的世界の性格を「無的普遍」としてとらえた彼の記述に象徴される。そして同書で明らかにされた歴史的世界と歴史的主体の概念は、その後の思索の根柢にあり、戦後に展開される彼の教育思想においても同様に重視されているのである。

2 『教育哲学』(1970)における「主体」

歴史哲学における「主体」概念との関連を明らかにするにあたり着目したのは、『教育哲学』に展開される彼の「主体」が「自由と必然のあいだに生きる存在」として理論化される点である。同書において高坂は、教育という営みは「自然と自由の交錯する場面において、歴史を作る自由な人間を形成すること」であると定義する。形成すべき目標に掲げられる「歴史を作る自由な人間」とは、『歴史的世界』における歴史的主体の意と考えられるが、それはすなわち種に限定されながらも自らの自由性においてそれと相克し、逆限定しながら主体として歴史形成に関与する個体のことであった。「自由と必然のあいだ」とはまさに歴史的世界と歴史的主体の弁証法的な関係を強調した高坂独自の概念であり、そこに彼の教育思想の根幹を見いだすことで、歴史哲学から教育哲学へと継承される思索の連鎖を明らかにした。

そしてそのことは高坂が単独で執筆したとされる『期待される人間像』の原案にも色濃くあらわれている（高坂 1964）。種的基体と個的主体の相克において個人が歴史的主体になるという高坂の論理では、自らの基体である過去の歴史、より具体的には「日本人」を否定することはすなわち自らの主体性の放棄であり、主体においてその基体と不断に相克し、否定的にかかわり合いながら歴史的世界を不断に形成していくことが目指される。よって自由なる「主体」の形成を説いた高坂の教育思想と、「日本人」であることを強調した『期待される人間像』での主張は矛盾するものでなく、歴史哲学において展開された「歴史的主体」において止揚されるのであった。教育における「主体性」は、歴史と社会によって限定されながらもそれを限定し返す主体の自由性であり、単に歴史の動力に流されるのではなく、自らの足で立ち自らの頭で考えながら歴史的世界を否定的に創造する「主体」の形成こそ、高坂の教育思想において目指される立場であることを明らかにした。

3 むすびと今後の課題

以上の研究において、現在まで「脱主体」理論の第一人者として理解されてきた高坂正顕の教育思想を「主体」概念においてとらえなおし、その理論の徹底した弁証法的性格を明らかにした。不断の相互否定的関係とその根幹に据える彼の論理では、固定された絶対的なものの存在は悉く否定され、歴史的世界は絶対の動性において基礎づけられる。ここに京都学派が共通して展開した「無」の思想が想起される。西田哲学の「絶対無」を端緒として京都学派に共有される「無」の思想は、それぞれの関心においてそれぞれの仕方でも展開される。高坂の場合、それは歴史的世界の根柢ですべてを包括する絶対の動的可能性ないし自由性であった。今回明らかにした高坂の教育思想を中心に、木村素衛や西谷啓治ら京都学派の思索を「主体」概念において明らかにし、彼らが展開した歴史的世界の哲学をも踏まえた「京都学派教育学」を展開することを今後の課題としたい。

なお本研究における研究の成果は、学会での発表（①「高坂正顕の教育思想における「主体」概念」教育哲学会第56回大会、神戸親和女子大学、2013年10月、②「高坂正顕と道徳教育」日本道徳教育学会第82回大会、札幌国際大学、2013年11月）、学会誌への投稿（「高坂正顕の教育思想における「主体」概念」『教育哲学研究』教育哲学会、109号、2014掲載予定）を行った。

引用文献

- 矢野智司「人間学—京都学派人間学と日本の教育学との失われた環を求めて—」（森田尚人他『教育思想史で読む現代教育』勁草書房2013）
- 田中毎実『臨床的人間形成論の構築』東信堂2012
- 古田光「第二次大戦下の思想的状況」（遠山茂樹他『近代日本思想史第三巻』青木書店1965）
- 轟孝夫「戦後の「京都学派」像—あるいは戦後における「哲学」の不在」（大橋良介編『京都学派の思想』人文書院2004）
- 船山謙次『戦後道徳教育論史』青木書店1981
- 高坂正顕『歴史的世界』1937（『高坂正顕著作集第一巻』理想社1964）
- 高坂正顕『教育哲学』（『高坂正顕著作集第六巻』理想社1970）
- 高坂正顕「期待される人間像（第一次草案）」1964（広島大学文書館所蔵『森戸辰男関係文書目録』森戸文書研究所2009、資料番号04961）